

小学校英語活動におけるコミュニケーション能力の育成 方略的能力に着目した実践授業の工夫

瀬高 あき*¹ 又吉 齋*² 三宅 茜巳*³ 安藤 義久*⁴

〈概要〉小学校外国語活動の目標である「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成とコミュニケーション能力の素地」を養う方法として、方略的能力に着目した指導計画と教材作成を行い、実践授業を通して、指導者と児童にどのような変容が見られるかについてそれぞれ検証した。本研究では、小学校のコミュニケーション能力の素地づくりに必要な手立てとしての方略的能力の育成をどのように指導すれば効果的であるか考察した。

〈キーワード〉

方略的能力、コミュニケーション能力、言語コミュニケーション、非言語コミュニケーション

1. はじめに

平成15年3月に文部科学省によって策定された『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」では、国際社会における英語のコミュニケーション能力の必要性が示され、英語教育の改善の目標や方向性が示された。さらに、平成20年3月には、小学校学習指導要領が改訂され、小学校第5学年及び第6学年に外国語活動が新設され、年間35単位の授業時数を確保した。外国語活動の新設の趣旨は、「社会や経済のグローバル化が急速に進展し、異なる文化の共存や持続可能や発展に向けて国際協力が求められるとともに、人材育成面での国際競争も加速していることから、学校教育において外国語教育を充実することが重要な課題の一つとなっている」ためである。外国語活動の目標の柱は、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める」「外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る」、「外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる」である。これらの柱を踏まえた活動を体験することでコミュニケーション能力の素地を養うことが目標である。

そこで、本研究では、「語彙や文法表現知識の少ない小学生では、ジェスチャー等の非言語的な手段に頼ることになる。実は、ジェスチャーなどの非言語的方略は、コミュニケーション能力を構成する重要な能力の一つである」という大城(2008)の見解をもとに、方略的能力を生かしたコミュニケーション能力の育成についての考察をおこなった。

大城賢(2008)によるとコミュニケーション能力とは、

- ①文法能力(文や文章を作り出す能力)
- ②社会言語学的能力(発話の適切さを判断できる能力)
- ③談話能力(文レベルではなく文章の構成に関わる能力)
- ④方略的能力(語彙力などの不足を補ってコミュニケーションを続けていく能力)

の大きく分けて四つの能力から構成されていると述べている。

本研究では、その中の一つである方略的能力に焦点を当てた。方略的能力とは、語彙や文法等の知識の不足を補い、何とかして相手とのコミュニケーションを図ろうとする能力のことである。方略的能力に焦点を当てた背景には、「二者間の対話では、ことばによって伝えられるメッセージ(コミュニケーションの内容)は、全体の35%にすぎず、残りの65%は、話しぶり、動作、ジェスチャー、相手との間のとり方など、ことば以外の手段によって伝えられる」と述べている非言語コミュニケーション研究のレイ・L・バードウィステルによる研究結果に基づいている。

このような結果により、人とのコミュニケーションにおいて、非言語が非常に重要な役割をもつことを再認識することができる。さらに、マジョリー・F・ヴァーカスは、九つの種類の非言語メディアとして「身体的性状」、「動作と表情」、「目の使い方」、「周辺言語」、「沈黙」、「身体的接触」、「空間と距離」、「時

間]、「色彩」を例にあげて、「ことばよりも強く」語りかけてくる非言語コミュニケーションの優位性を示している。

本研究では、その中の、「動作と表情、目の使い方」である「ジェスチャー」「アイコンタクト」などの非言語コミュニケーションに加え、「つなぎ言葉」や「あいづち」を指導することで、方略的能力を生かしたコミュニケーション能力の育成に効果があるのではないかと考え、検証をおこなった。

2. 研究内容

1. ALTの方略的表現の現状

- ・授業風景を録画し、ALTが児童に投げかけている英語表現及び方略的表現を書き出し、分類分けする。
- 2. 児童はALTの話していることや方略的表現をどの程度理解しているのか調べる。
- 3. 現状を把握し、ALTと授業改善の余地を話し合う。
- 4. 方略的表現を動画で撮影し、積極的に方略的表現を使うと、コミュニケーションの幅が広がることを指導する。
- 5. 検証授業をおこなう。(2回)
買い物、道案内、クイズ大会など、場の設定を工夫する。
- 6. 録画した検証授業をもとに、児童の行動分析をし、検証前と比較する。方略的表現を積極的に取り入れた指導することでどの程度コミュニケーションの幅が広がったかや児童のコミュニケーションに対する気持ちの変化があったのかを調査する。

考察で扱う方略的コミュニケーション能力

・ジェスチャー

ジェスチャーとは、身振り手振りのことである。本研究では、小学校の発達段階では、英語の語彙や文法の知識が少ないと考えられるため、単語がわからない時に、コミュニケーションを中断させるのではなく、ジェスチャーを使って、積極的に相手に自分の思いを伝えるための手立てとする。

・アイコンタクト(表情)

アイコンタクトとは、目で合図して、意思を伝え合うことであり、「私はあなたの話を聞

いている」という合図にもあり、信頼関係を高める効果もある。さらに、視線だけではなく表情を和らげて聞いたり、話したりすることにより、よりよいコミュニケーションを図ることにつながると考えられる。

・つなぎ言葉

つなぎ言葉とは、会話をつなぐ役割があり、話の流れを整理したり、相手に同意を伝えたり等、コミュニケーションの幅を広げる様々な効果がある。

・あいづち

あいづちとは、弟子と師と向かい合って互いに鎚を打つことの意味があり、「相槌を打つ」とは、相手の言葉に同意のしるしを表してうなづく。相手の話に調子を合わせるという意味がある。

取り上げた指導例

ジェスチャー(非言語手段)

アイコンタクト(非言語手段)

つなぎ言葉及びあいづち(言語手段)

- ・相手の発言に対しての反応を積極的に伝える表現
- ・コミュニケーションを中断させないための表現など。

Ah-ha/uh-huh That's nice. That's right.
Yeah, Me,too. Really? How about you?
Let me see. I see. Well... Pardon?
Why? Because,

3. まとめ

方略的表現を積極的に児童に指導することでコミュニケーションの幅が広がること、さらに児童が他者とコミュニケーションを図ることへの楽しさや喜びを味わうことを期待し本研究を継続していきたい。研究成果をあげるためにも、コミュニケーション場面を作り、積極的に指導した方略的表現を使うであろう場面を必然的に設定することが重要となる。

参考文献

- 文部科学省(2008),『小学校学習指導要領解説 外国語活動』,東洋館出版社
松川禮子,大城賢(2008),『小学校外国語活動実践マニュアル』,旺文社
マジョリー・F・ヴァーカス(1987),石丸正訳,『非言語コミュニケーション』,新潮社

*¹Setake, Aki : 那覇市立仲井真小学校 e-mail= setake913@yahoo.co.jp

*²Matayoshi Ituki : 沖縄女子短期大学 *³Miyake Akemi : 岐阜女子大学 *⁴Ando Yoshihisa : 岐阜女子大学